

血液凝固検査



血が止まるわけ

血管が切れて出血すると、まず血小板が集まってきて傷口をふさぎます(一次止血)。次に血液中の凝固因子と呼ばれるたんぱく質が働き、繊維素の網で血小板をおおい固めます(二次止血)。この凝固因子の働きを見る検査が「血液凝固検査」です。凝固因子は12種類あり、ローマ数字でⅠ～ⅩⅢの名称が与えられています(第Ⅵ因子は欠番)。凝固因子の働く仕組みは大変複雑です。

血液凝固検査とは？

血液を固めたり、溶かしたりする働きを調べる検査です。いろいろな検査項目がありますが、今回はPT、APTT、フィブリノーゲン、Dダイマーについて簡単にお話します。

PT<プロトロンビン時間>

止血機能を見る検査で、経口抗凝固療法(ワーファリンなど)の指標になります。肝臓で作られるため肝臓の機能が低下すると延長します。当院の報告値は%とPT-INRです。PT-INRは国際標準化比で、経口抗凝固療法時のモニターとして使用します。



APTT<活性化部分トロンボプラスチン時間>

PTと一緒に測定することにより、止血機能の異常がどこにあるかが、おおよそわかります。試薬メーカー、ロット、測定する装置などで、測定値が異なります。

フィブリノーゲン

止血作用に欠かせない働きをするタンパク質です。低下すると出血しやすくなり、高度に増加すると血栓傾向が発生します。肝臓で作られるので、肝硬変などの肝障害で低下します。また、感染症など炎症疾患で増加します。



Dダイマー

DIC、大動脈瘤、深部静脈血栓症などの血栓性疾患の早期診断に有用です。Dダイマーの増加は血管内に血栓が存在することを強く示唆します。一方、低値であることは深部静脈血栓症の潜在を否定する指標になります。また、手術後は高値を示します。